

〔連載〕武州みたけの信仰⑫ やまとたけるのみこと 日本武尊について(上)

國學院大學教授
神道學博士

三橋 健

日本武尊と御嶽山

御嶽山のはじまりを語る由緒記には三種類あって、そのうち元和八年(一六二二)の『御嶽山社頭由来記』が、広く知られております。

この由来記には、御嶽山中で道に迷った日本武尊を、白い狗が案内する話が記されております。また「武蔵」という国の名前は、日本武尊が関東を平定するために、御嶽山へ鎧を納められたことに由来するとも記してあります。これらの伝えによって、古来、武蔵御嶽神社は、武蔵の国で第一の神社として、人々から尊崇されてきました。

このような説話は、御嶽山が古くから権威ある霊山であることを、広く世間に知ってもらうために作られたものと考えられます。そういうわけですから、この説話を歴史事実と考えるのは無理なことですが、大切なのは、この説話が長年にわたって多くのの人々によって語り継がれ、信じられてきたということです。

そこで、私どもは日本武尊とは、どのようなお方であるのかを知っておく必要があると思うのです。

景行天皇の太子

ところで、日本武尊との表記は日本書紀に見えるところで

倭建命とは「大和の勇猛な者」という意味で、実際にお名前通りの、強く勇ましい性格の方でありました。倭建命は第十二代の景行天皇を父とし伊那毘能大郎女を母として誕生なさいました。景行天皇には多くのお后がおられ、皇子や皇女が、何と八十人もあったが、そのうち太子になられたのは若帯日子命と倭建命と五百木之入日子命の三人だけでした。

倭建命の幼い頃の名前は小確命といい、別名を倭男具那命と呼ばれておりました。その小確命には大確命という兄がいました。お二人とも、と

大確命の殺害

でも珍しい名前であります。日本書紀によると、二人は双生児として生まれたと伝えられており、小確尊は日本童男尊、日本武尊ともいうと記してあります。

再び古事記に戻りますと、小確命は、あちこちをめぐる天皇の命令に従わない神々や服従しない人々を平定されたとあります。

話は変わりますが、美濃の国の大根王には、兄比売と弟比売という二人の美しい娘がおりました。天皇は二人をお后に迎えようとされ、大確命に連れてくるようにと命じました。しかし大確命は、二人を自分の妻にして、別の女を天皇に差し出したのです。そのような事があってから大確命は天皇の前に顔を出さなくなり、朝夕のお食事も一



日本武尊東征の図 齋藤英朋作 (明治42年作)

熊曾建の征伐

緒にしなくなりましてので、天皇は小確命を呼んで、「大確命をいたわり、やさしく教えてやってくれ」と頼まれたのですが、小確命は天皇のお言葉を逆に理解して、大確命が便所から出てくるのを待ち受け、手足をもぎ取り、それを菰に包んで投げ捨てたのです。

このような荒々しい性格を見て、天皇は小確命を遠い西の国へやってしまおうのが良いとお考えになりました。天皇は小確命に向かって、「九州に熊曾建という二人の兄弟がいる。彼らを討ち殺すように」と命令されました。小確命は、まだ十五、六歳ぐらいの少年でしたが、一人で九州へ出発いたしました。小確命が熊曾建の家に到着してみると、軍隊が嚴重に家を取りまいて警備をしておりました。また熊曾建の家は新築をしたばかりで、やがて落成の祝宴を迎えようとしていました。小確命はその日を待つことにいたしました。

女装の小確命

祝宴の日、小確命は少女のように髪を垂らし、

叔母の倭比売命からもらった女の着物に着替えて変装し、ふとところに短剣を納め、女どもとともに祝宴へまぎれこみました。熊曾建の兄弟は、小確命とは知らないで、その少女に感心して、二人の間にすわらせて手拍子をうち、歌ったり飲んだりしていました。宴も盛りを過ぎ、皆が酔ったところ、小確命はふとところに納めていた短剣を取り出し、兄の熊曾の着物の襟をとって胸に突き通しました。弟の建は、恐れて逃げ出したが、階段の下で追いつき、短剣で尻を突きさしました。「どうぞ、剣を動かさないでくれ、申し上げたいことがあります」

「あなたは、どのようなお方なのですか」と聞いた。小確命は、「あなた様は、どのようなお方なのですか」と聞いた。小確命は、と弟の建がいったので、しばらく待つと、

「私は大和の纏向の日代の宮にいて、日本国を治めておられる景行天皇の子で、倭男具那の王という者である。天皇はお前ら二人を殺せと仰せられた」と答えた。すると弟の建は、「ほんとうに、その通りでございましょう。西の国には、私も二人を除いては強い者はありません。私の名前をさしあげ、今より後は、あなた様を倭建の御子とほめたたえましょう」といった。このようにいい終わると、小確命は熊曾建を熟れた瓜を引き裂くように、ずたずたに切り殺した。

この時から、小確命のお名前をほめたたえて、倭建命と申すようになりました。

その後、倭建命は大和の国へ帰る途中で、山の神や川の神、また入江の神たちを平定されて上京なさいました。